

VI-3

血清 Free Light Chain を測定した非分泌型多発性骨髄腫の 2 例

○田中孝正^{1,3}、楠本 茂¹、飯田真介¹、伊藤 旭¹、稲垣 淳¹、石田高司¹、矢野 寛樹¹、
李 政樹¹、小松弘和¹、稲垣 宏²、上田龍三¹

名古屋市立大学 腫瘍・免疫内科学¹、同 臨床病態病理学²、JA 愛知厚生連海南病院内科³

【目的】非分泌型多発性骨髄腫の治療効果判定は、骨髄中の形質細胞の割合の変化に依存しており、骨髄穿刺を頻回に行う必要がある。今回、血清中の Free Light Chain (FLC) 測定の有用性について非分泌型多発性骨髄腫 2 例にて検討した。【症例 1】52 歳女性。2005 年 11 月より腰痛を自覚し、2006 年 12 月に高 Ca 血症、椎骨圧迫骨折の精査目的で入院となった。血清および尿中 M 蛋白を検出せず、末梢血および骨髄に形質細胞を多数みとめ、非分泌型多発性骨髄腫と診断した。VAD 療法 3 コース終了後、大量エンドキサン療法で末梢血幹細胞採取を行い、完全寛解を得た。血清 FLC は治療導入後速やかに低下し、従来の骨髄検査による治療効果判定と一致していた。【症例 2】66 歳男性。2005 年 5 月頃より腰痛を自覚し、2006 年 2 月には背部痛も加わり 10 月に前医より精査目的で紹介入院となる。血清および尿中 M 蛋白をみとめず、骨髄中に異型形質細胞を多数みとめ、多発骨病変もみとめたことから、非分泌型多発性骨髄腫と診断した。初診時、血清 FLC は の低下と / 比の偏りを認めたが、
自体は基準範囲内であり明らかな増加とはいえず、治療効果判定の指標にはできなかった。【考案】初診時に一定量以上の Light Chain を分泌している非分泌型多発性骨髄腫においては、血清 FLC の導入によって非分泌型骨髄腫の治療効果判定が定量的かつ簡便に行うことが可能であることが示唆された。